

図書館だより

'83. 6

目次

ブックディテクション・システム	1
資料紹介	
近野 亘	3
ほとんどわたしと	
黒川 昭和	4
木村 フク	5
図書館をあなたのものに 卒業論文作成のために	
江草 久司	6
日高 昭二	7
後藤 昌彦	8
購入希望図書	9
ぶらうじんぐる〜む	
小林留美子	10
高柳 早織	11
NEWS	12

ブックディテクション・システム

—開かれた図書館をめざして—

読みたいと思う本が棚に見当らず、館内で利用されている様子もなく、貸出手続きもされていない、結局、利用できなかった—こんな残念な経験をお持ちの方が割合多いのではないのでしょうか？

本学図書館は昭和56年4月、創立当初から行なわれていた閉架式の枠をはずし、できるだけ沢山の資料を自由に利用できるような接架方式に切り替えました。同時に出入りの際身分証明書等のチェックも廃止し開かれた図書館の第一歩を踏み出しました。しかし、利用者の便利さを第一義としたこの方式にも種々の問題が残ります。その一つに、不明本の増加が挙げられ図書館運営にとって問題を投げかけております。

図書館の使命は勿論、豊富な文献・蔵書を持つことですが、加えてこれらの資料を必要な時に何時でも利用者に提供できる状態にあることが必要です。残念ながら講義に密接しているもの、利用頻度の高いものに不明本が多く、更に現在では入手困難なものや、貴重な学術雑誌の類にもこの傾向がでています。

近年、学問の進歩とともに、図書館に求められる機能も多様化し、従来の閉鎖的な図書館から自由に資料を利用できる開架式に移行する図書館が増えておりますが、紛失図書は共通の悩みとなっており、この解消のために各種の研究、調査が盛んに行なわれております。今日最も有効と考えられているのがブックディテクション（開架図書自動チェック装置）で、これは米国で開発され、1970年にセント・ポール・パブリックライブラリーに初めて設置されて以来、アメリカはもとより広く世界各国の図書館に導入

されてきました。我が国では、1975年に筑波大学体育芸術図書館に第一号機が設置され、その後、国際基督教大学図書館など約20数大学、道内にも最近2、3の大学図書館に設置され効果をあげております。

本学にも、9月初旬にこのブックディテクションが設置されます。ひとくちでいえば、この装置は電子工学を応用した図書紛失防止装置ということになりますので、最初は異和感を持たれるかも知れませんが、見方をかえると利用者はカバン等の荷物を持ったまま自由に入出りできる理想的な図書館が実現することであり、加えて紛失図書も減少して必要な時に必要な資料が得られるというメリットもできます。

最近めざましい電子工学の進歩にささえられ社会の各分野でコンピュータの利用が盛んに行

なわれており、本学図書館も、その波を避けて通るわけには参りません。しかし、コンピュータが持つ能率万能と利用者のためにある図書館の機能との調和点が、これから一番問題になるものと考えられます。今後、本学図書館が近代化の一貫として、あらたな構想を推し進めていくなかで図書館奉仕の基本理念を忘れることなく、常に利用者の立場にそったサービスに心掛け、貴重な資料の適性な保管にも目を向けながら開かれた図書館をめざして進みたいと思います。

最後に、最近5ヶ年間の貸出冊数の推移を次表に記しておきます。開架式に移行してからの利用の増加が御覧いただけるとと思います。

(大高興子、奉仕部)

年間貸出冊数の推移

昭和53年度	26,322冊
昭和54年度	25,785冊
昭和55年度	27,687冊
昭和56年度	38,164冊
昭和57年度	38,885冊

(昭和56年度より開架式に移行)



貸出登録者数(学科別) 1982年度

大学国文学科	94%	家政科	90%
大学英文学科	85%	家政コース	
短大国文科	95%	食物	97%
短大英文科	84%	栄養コース	
		保育科	97%
		別科	78%
全学生	90% (1,703名 = 100%)		

資料紹介

聖ベネディクト読誦集 ヴァティカン教皇庁立図書館蔵

原本複製（ファクシミリ）岩波書店。

近野 巨（宗教学）



ヨーロッパ中世を暗黒時代とする歴史観は、西欧はもとより、わが国においても近年とみにあらためられている。中世に関する諸般の出版物が最近増えたことをみてもそれはわかる。いずれにせよ今日、少くとも「西欧」というとき、それが「中世」に始まるとすることは或る意味で正しい。ところで、その「中世」を支えてきたひとつの理念に「ヒューマニズム」がある。それはまた今日いろいろ解釈されているが、ヒューマンであることを、つまり人間的であることを強調する教育理念とそれに応じた教育体系である。「ヒューマン」であるとは、「言語を理解する」したがって、言語が「書物」に結晶され、そこに書かれた「知識」を研究することにも通じる。それこそ「人間的だ」と中世の人びとは考えていた。この強調こそが、文書の研究となり、写本の技術の向上となり、そこからもろもろの具体的成果として今日にのこされるゆえんとなったのである。これは主として12世紀以後の大学でなされてきたことではあったが、実は、すでにその前身である諸種のスコラ（学院）、なかんずく修道院での貢献の大きさを見おとすわけにはいかない。

ローマとナポリのほぼ中間に、モンテカッシーノ山がある。6世紀中頃ここにひとりの修道士が住みつき、西洋型修道生活の基礎をかためた。聖ベネディクトであり、西洋修道制の父、あるいは、西欧の父と呼ばれた人である。

1980年、聖人の生誕1500年記念にあたり、ローマ教皇庁立ヴァティカン図書館が開催した「ヴァティカン・ラテン古稿本」（Codex Vaticanus Latinus）の公開展示も、書物と修道院と聖ベネディクトの密接な結びつきが

あればこそであった。その後内外関係者の熱烈な要請により、ヴァティカン図書館所蔵の稿本のファクシミリ出版が企画されたのであるが、いみじくも、この「聖ベネディクト、聖マウルス、聖スコラスティカの祝祭のための読誦集」（Vat. Lat. 1202）が、その第一号となったのもそのゆえである。

創立者、及びその直弟子聖マウルス、創立者の妹聖スコラスティカの祝日（普通は誕生日か死去の日）に唱えられる聖務日課（一日八回のきまった時間の祈）の一部であり、当時モンテカッシーノ大修道院長デシデリウス（1058-1086）の命によって書かれ、1070年頃完成をみた。モンテカッシーノの筆写室では独特の字体、書体を生み、装飾もまた特徴的であったといわれるが、そこから重要な写本が生み出されたことは事実である。「ベネヴェンターナ」（ベネヴェント書体）と呼ばれるものであるが、その解読はまた大変な仕事となる。さらに、各聖人の生涯を画いた挿絵があり、ラテン語テキストを読めない者にとっても図像の内容が理解できるようになっている。（一般に中世の芸術は、目で見る聖書といわれるように、文字の善及していない人びとのためでもあった。）

今般このファクシミリ出版が、本学の図書館を飾ることになった意義はまことに大きい。西欧文化の一端が、ほぼ原本に近い形で複製され、それを目のあたりにできるのは、まさに感動的である。いずれ、思想史（中世）の講義で、私なりにとりあげることになるであろう。



ほんとうわたしと

本との出会い

黒川 昭和 (教育学)



読者カードをご覧になったことがあるでしょう。例えば、「本書を何でお知りになりましたか?……1. 書店で実物を見て、2. 知人にすすめられて、3. 講義等で先生にすすめられて、4. 広告を見て(新聞・雑誌)、5. 書評を読んで、6. その他()」という欄が必ずある。

☆ ☆

少年の頃読んだ『グリム童話集』は、叔父さんからのプレゼントであった。分厚い本だったが繰返し読んだ記憶がある。『文章の話』里見淳著(日本少国民文庫13、昭和12)に出会ったのは、友人の亡父の蔵書の中にあっただのを手にした時だった。……「ヘンリック・イブセンというノールウエーの文学者が "you must will the thing you will." ということを言っています。直訳すれば、**汝は、汝の欲するものを、欲せざるべからず、ですね。やさしく言い直すと、お前は、たいものをたいしなくてはいけない。——これを、私流に言う、意志・行動のなかにも、自分があり、他がある。**ということになります。それを、そんなぎこちない言葉は使わずに、さらりと、しかも鋭く、——**たいことをたいせよ——**とは、いしくも言いしものかな、です。このイブセンの言葉が、みなさんの、一生涯のいゝ道づれになることを、深く心から望みます。」……**たいことをたいせよ、**という言葉は、35年以上経った今でも鮮明に憶えています。里見淳自身の生き方だったと思う。

☆ ☆

青年期の頃になると、『学生と読書』河合栄治郎編(日本評論社、昭和13)に出会ったことが、私の読書入門と言える。「昭和21年10月11日」。小樽市役所通りを下ると、国道に面して、「文屋」という古本屋が今でもある。その書

棚で発見した日付がインクで書き込んである。田中と竹田の印が押してあるので、私が三番目の所有者なのかも知れない。とにかく、私は、この本で、「読書の意義と価値」の森の中に入り込んだ。第三部、読書の資料、特に**四必読書目**は、私の読書欲をかき立てたのであった。出陣の『哲学以前』、西田幾太郎の『善の研究』、阿部次郎の『三太郎の日記』、倉田百三の『愛と認識との出発』、『出家とその弟子』、『布施太子の入山』、カール・ヒルテイの『幸福論』、チャールズ・ダーウインの『種の起源』、ドストエフスキーの『罪と罰』、パウル・バックの『大地』や『風と共に去りぬ』など、思い出は多い。

☆ ☆

このようなわけで、私の場合、「書店で実物を見て」という場合が多いように思う。私にとって、「本との出会い」という言葉の重みが感じられます。大げさに言えば、「何か私を導いて下さっているのだ」という気持ち次第に強くなるこの頃です。それは、研究論文などの資料についても、同じことが言える。勿論、アンテナは立てている。そのアンテナに感応する資料との出会いも、私にとって不思議な縁と思われるのである。

☆ ☆

この頃私はあまり書物を読まない。眺めるだけである。本のページをばらばらとめくって、決して深入りしない。その中に何回も何回も柱を立ててみる。アンテナに感応する資料の百か二百について、私は図書館のお世話になる。コピーを手にした時、わが図書館司書の方々に手を合わせたい感謝の気持ちでいっぱいになるのです。

幼い頃の思い出

木村 フク（交換室）

遠い昔の本と私の思い出話です。小学校を卒業した年であった。まだ学校へ行きたい、遊びたいという年頃の私の意志に反して、体の方がいうことをきかず、女学校入学のその日から足の病のために倒れ、二十歳までベットに釘付けにされてしまった。

当時担任だった先生からお見舞として贈られた文庫本、アミーチス作『クオレ』の上下巻、これが私を本の虜にしてしまった口火である。

あたかも私がこの物語のヒロインにでもなったかのように夢中にさせられてしまった。

その後、本がはしくても選ぶ事も、買いに行く事も出来ず、母には叱られながらも見舞に顔を見せてくれた友人知人に本の借用を願った。

一つには足の苦痛を避けたい手段であったのかも知れない。少年少女雑誌はもとより、伝記ものから大人の本まで種々雑多、作者、作品名、内容などは定かではないが、少し記憶している中で、大迫倫子の『女学生日記』ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』速水竜夫の『一つの歌を』、武者小路や漱石のもの、吉川英治の『宮本武蔵』全巻、またゴッホの『炎の人』などと手当たり次第の乱読そのものであった。

昔の本の漢字には仮名がふってあり、私にでも容易に読む事が出来た。そのうちに借りる本

にも限度があり、本の無い時にはラジオの朗読にも耳を傾けたものであった。そしてそれらの本の中で何か心を打つ文章に出会うと、ノートに抜書きしたもので、今でもそのノートをめくと頷ける箇所のあるものなつかしい。

今まで歩いてきた道をふり返ってみた時に、病のため満身に学校へは行けなかったが、幼い学生時代作文の時間に、思った事を素直に文章にまとめる事や、音読・黙読する事など教わりその作文をラジオ放送の朗読にまで運んでくれた恩師、また、頭の中を素通りではあったが病床の孤独を慰めてくれた数々の本、それからこの年までの行きずりや、かかわり会えた全ての人々が私の人生の恩師であった事を確信している。

今、見る事の好きなのは辞書で、漢字の起源とか言葉の語源など面白く、年令と共に忘れる漢字も多くなり、辞書を引くのが楽しみの一つになってしまった。

現在持っている小さな私の本箱の限られた本の中で大切にしている二冊がある。一冊は亡き父が残して行ってくれた明治36年の画辞典で表紙はもうボロだが、中は和紙のしっかりしたもので、時折重宝している。もう一冊は終戦の年静岡の青空市場で欲しくて手に入れたもので、ざら紙に印刷された、啄木の『一握の砂』である。この二冊が私の蔵書？なのかも……。

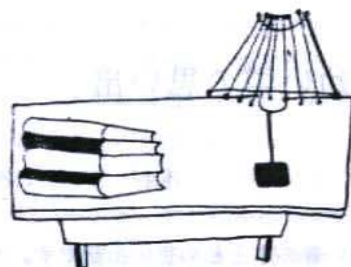
こうして時の流れのうちに、現在は恵まれた環境の場で大学図書館を知り、時折おじゃましている。あまりに沢山の本に目を見張り、どの本を手にしようかと、オロオロしながら書棚を見上げている幸せな私である。

(カットも木村さんです)



図書館をあなたのものに

卒業論文作成のために



卒業論文作成に当って

江草 久司 (英文学)

見事な論文を書こう、と意気込む姿はほほえましいが、結果は必ずしも当初の意図に添わない場合が多いようだ。そこでいくつか助言を示してみよう。

1. 全体像の把握

卒業論文を書く人のほぼ全員が文学に関する作家論か作品論を選ぶので、その観点から述べてみる。多くの人が原文か翻訳ですでに読み、親近感を持った作品を採り上げる傾向が強いようだが、作家の理解に欠けている場合が少なくない。一応の作家論には目を通し、すでに評価の定まっている特性や傾向は理解しているようだが、そこで止まってしまうので公式的な見解に従って書くことになる。だから鋭い切口も個人的観点も見られないばかりか、作品の理解度も浅いものになってしまう。基本は作家の全体像を把握することだが、そのためには文学史的な前後関係(通時的研究)と同時代の作家群と比較して特性を探ること(共時的研究)が必要となる。その際、時代の流れと社会的背景をよく理解しておかなければ、作家の全体像は浮び上がってこない。文学的活動面だけで作家を判断することは、ある意味では一面しか見ていないことになるので、注意する必要がある。

2. 作品の理解

作品理解の重点を **theme** だけに限定する傾

向がある。理想からいえば、作家論や作品論などを読まず、一切の先入観なしに自分の眼と感性と批評精神を頼りに作品にぶつかることが望ましい。そこから個性的な読み方が生れてくる。**theme** や **symbol** 探しを中心にした読み方では正しい作品理解には達しない。長篇か短篇かで読み方も異なるが、自分だけの目で精密に再読三読し、時代や社会的背景と連動させ、作家の **message** をくまなく掬い上げなければならないし、技巧面における効果性も見落してはならない。作家の全体像を把握し、作品の十分な理解ができれば、論文構想の方向は自ずから定まってくる。あとは論証に適切な構成を考え、資料や引用の効果的使用を工夫するだけである。

3. Bibliography の完備

1と2に述べたことが準備できても、十分な論証には不安があるだろう。そこで参考資料や関係書目の調査が必要となる。その時は、本学図書館の資料や館員が大きな味方となってくれる。スタッフの助言を得ながら **Bibliography** を整え、入手できるものは全て読んでみることである。その中から必要と思われる資料を整理し、論証の補完に万全を期さなければならない。最近の学生は本を買わなくなった、とよく言われているが、作品や作家論、それに基本的な参考文献は自費で購入し、常時手もとに置いて活用すべきである。何でも図書館に頼るのでは情けない限りである。

4. 論理構成と英語表現力

英文学科の卒業論文は全て英語で書かなければならない。従って英語表現力の貧しい人は論文選択を避けるべきである。いくら読解力にす

ぐれ、意欲に満ちていても、英語が書けなければ空転するばかりである。しかも論文であるから英語的発想による論理的構成力も要求されてくる。日本語による論理構成は頼りにならないし、何とか英語に直してみても単純で幼稚な表現にしかならない。作品の引用と資料の抜書だけでは論文にならない。しかも本文は自分の英語で書かなければならない。いくら注意しても苦しくなると参考文献から英文を盗用する人が多いが、審査に当る先生方が見ればたちまち露見することを、肝に銘じておいてほしい。日本

君はなぜ卒論を書くのか

日高 昭二 (国文学)

昨年、僕が読んだ卒業論文の中で面白かったものといえば、それは何ととっても「絵にも書けない怖ろしさ——埴谷雄高『虚空』論——」であろうか。なにしろ論の途中で、「それでいい／＼」とか、「こうでなくちゃ／＼」とかの、巧妙な合の手が入るといふ、世にも珍らしい論文なのだ。論の当否は別にして、楽しいこと限りなく、読み手の僕は、つつい夜に紅茶に一滴また一滴、ブランデーの量が増えたのだ。

しかし、これは言うまでもなく例外中の例外。大部分の論文は、いと手堅く、正統的などいってもいい出来映えであったろう。先行論文を序説ふうの手際よく跡づけ、ほどよく異議申し立てを施したのち、本論にはしかるべく、むしろ男性的(?)なほどの力技さえあふれている。かつ、叙述のスタイルも、なかなか堂に入ったもので、「氏は言う云々」と温和しく切り出しながら、一転、「果してそうか」と切り込む口上は、まさに女ひとり、度胸の船出といった天晴れなワザくれでもあった。

さてそこで思うのだが、論の布陣といい、叙述のスタイルといい、すでに僕にはこれ以上望む何ものも見当らない。いわばその方面の手順は、完璧だといってもいいだろう。だが、やは

語の参考書目はその点で役に立たない。英語表現力を養う意味でも原書だけに頼るべきだし、範例となる慣用表現や文形は日頃英文を読む時に集めておくに役に立つ。なお本学の論文は、MLA Styleを採用しているの、図書館に常備されている(指定図書棚)『MLA 英語論文の手引』を活用してほしい。全員が使える部数が用意されている。

論文の準備は3年から始めるべきで、4年になってからでは遅すぎる、ということも留意していただきたい。



り何か徹底して欠けている、とも思うのだ。

もちろんこれは、僕ひとりの考えとして言うのだが、僕は、学生の卒業論文に、研究上の検討やら学説上の批判やらを、基本的には要求しないという立場である。むろん、それが出来ることは大いに結構なことだし、また論の進行を見た上では、そのことを願うこともたびたびある。だが、そのことを性急に追うあまり、諸君の論文がたちまち萎縮して、ただ論理を無理に通そうと腐心するだけの、或いは、味読に耐え得る作品が、習い立ての方法の奴隷と化すというような、まこと無残な結果になるのを最も怖れるのである。

言うまでもなく、方法意識のない研究や批評は、なるほど魅力には乏しくみえる。まして、現代における研究上の蓄積は、さらに新しい出口を求めて日々賑やかである。しかもそのための手引書も数多く、これまた鮮烈で斬新なアプローチを呼びかけて、まるで安手な百貨店の陳列棚のごとくに並べてみせている。嘘だと思ふなら、図書館のお姉様たちに聞いてみればいい。こちらは専門店のごときプロの腕前で、たちどころに見事な相談にのってくれるハズなのだ。

けれども僕は、卒業論文は研究や学問とは一

寸違、言うならばひとつの文学的な経験だと思ふのだ。それは、これまでの各人各様の感性や知のしくみを、作品という表現を通して対象的に捉え返し、逆に新しく表現する者としての自分を、現実生活と想像の間に視つめ直す、その経験の最初の定義なのだ、と思ふのである。問題提起もいい、仮説の論証もいいのだが、それを他人に向けて、つまらぬ鬼の首をいくつ取ってもはじまらぬではないか。自分の感性にはちっとも目覚めないで、ただ「菜穂子」や「檸檬」や、また「春は馬車に乗って」の作品を、たとえ方法的にあざやかに切っても、どこか虚しかろう。疑いはまず自分に向けて、その言葉と想像力にこそ振り向けたいのである。

卒業論文を念頭に入れはじめると、君たちは

「学生紀要」作成心得

— 目的は研究方法を学ぶこと —

後 藤 昌 彦 (社会福祉)

保育科では1964年に「学生紀要」が創刊され、今年の3月で20号が刊行されている。紀要発行の目的は、幼稚園・保育所・福祉施設実習での貴重な体験、ゼミでの研究成果等を後輩に残すことであった。したがって初期の紀要には、実習体験記録、実習の感想文、ゼミの紹介といったエッセイ風のものも多く、研究論文や研究報告は少なかった。ところが最近の紀要をみると、「幼児の考え方・判断の基準—ピアジェ理論を通して—」「子どもの歴史—日本における児童観の変遷—」「家族の必要性—子どもの成長にどのような意義をもつのか—」といった本格的な研究を要する論題が目につき、学生達が二年間の学びの中で関心をもったテーマを選定し、探求しようとする研究志向が強く現われている。紀要論文の多くは原稿用紙(400字)20枚~30枚ほどの小論文であるが、調査・研究にもとづいて書かれた研究の裏づけのある Research paper となっている。そこで学生諸君が紀要論文を作成するにあたって参考となる研究過程を

極端に中性化する。これが、近頃僕の抱く感想だ。そこで君たちは、慣れない論文コトバを操り、ムツカシイ方法意識にめざめ、みるみる論理的な理屈屋さんになる。

一体、あのぞくぞくするほどの、小説の読み手はどこに行ったのか。同じ性を持つ女流作家は、なぜかくも忌避されるのか。男の描く女の肖像は、女の眼から見るとどうなのか。君たちは決して自分を、その根源をめざすような具合には振り返らない。けだし、その如く自分を振り返っていたら、ソツロンどころか卒業もできなくなる、とでも言うかのように。ならばせめてのこと、「そうでなくちゃ、！」という合の手だけは、読み手の側に残して置いてもらいたいと思ふのだ。



簡単に述べることにする。

論文が完成されるまでの過程は、通常(1)テーマの選定、(2)文献・資料の収集、(3)資料研究、(4)下書き、(5)補正(見直し)、(6)浄書である。論文作成の時間配分は、(1)~(3)の前期作業が全過程の7割、(4)~(6)の後期作業が3割と考えられている。

(1)テーマの選定。テーマ選定の全過程に占める時間的割合は少ないが、論文全体に及ぼす影響は重大である。テーマがよいものであれば、その後の資料収集は順調に進み、有効な資料研究がなされていくものである。したがってテーマの選定は慎重でなければならない。テーマを選定する際、各人は次のことを考慮する必要がある。研究者はテーマに強い関心を持っていること、テーマは自分の持てる能力で研究が可能であること、テーマを解明するのに役立つ資料の入手が可能であること、そして研究するに値するテーマであること等である。

(2)文献・資料の収集。研究テーマが決定され

た次の作業は、研究に使用する資料を文献、調査統計資料、雑誌論文、その他関係資料の中から収集することである。この段階で図書館を大いに利用することになるが、開架式の図書館で書棚の間を歩きまわって適当な本を見つけだすのは、重要な資料を入手する確実な方法ではない。文献・調査報告書は、図書館に分類されているカードの中から、テーマに関連する項目を調べ、雑誌論文に関しては国会図書館が発刊している「雑誌記事索引」等を利用して、体系的、合理的に研究に必要な資料を収集することが大切である。

(3)資料研究。この作業は論文作成全体の中核となるもので、全過程の5割強の時間的配分を必要とする。収集した資料を丹念に読み、必要部分はカードに整理していく。その際、資料をまとめるだけでなく、資料の批評、検討を行ない、自分の考えを書きしるしていく、この忍耐を要する作業を継続する中で、論文の骨組みがつけられ、論文が論理的に構成されていくのである。

(4)下書き、(5)補正、(6)浄書の論文書きについては、紙数の関係で省略するが、前段の資料研究が十分で、論文構成がしっかりしたもので

あれば、実際の論文書きはそれほど困難なものではない。ところで一度作られた論文構成は変えがたいものではなく、(4)～(6)の作業を進めていく中で修正され、より説得力のある構成を作りあげていくという視点を忘れてはならないことである。

以上のような研究過程を通して、論文が作成されていくが、半年におよぶ紀要論文作成の中で、私が学生諸君に期待しているものは、独創的な論文を書きあげるのではなく、研究方法の基本を学んでいただきたいことである。私の学生時代、指導教官であるK教授が「今まで様々なテーマで研究してきたが、研究の方法は、卒論指導教官に教授されたものが基本になっている」と話しておられた。保育科の学生は「学生紀要」によって、本格的な研究を初めて経験することになると思うが、学生時代に学んだ研究方法は、今後、保育・児童福祉の諸問題を深く考え、解明していく重要な手段になることと思う。この機会に、各先生より研究方法の基本について訓練を受け、自分の研究方法を獲得することを期待している。

購入希望図書リスト (82.9～83.3)

アイヌ民俗文化史への試論 山川 力著 未来社
1980 (389-Y27)

地域子ども会 城丸章夫著 草土文化 1982
(379.3-Sh89)

道成寺 郡司正勝ほか著 小学館 1982
(772.1-D87)

ファンダメンタリズム J. パー著 ヨルダン社
1982 (190.2-B24)

芸双書10 かぶく 飯塚友一郎ほか著 白水社 1982
(779-G32-10)

源氏物語の原点 伊藤 博著 明治書院 1980
(913.36-I91)

幻獣辞典 H. ホルヘス・M. グレロ著 昌文社 1982
(964-B65)

女帝エカテリーナ A. トロワリア著 中央公論社
1982 (953-Tr7)

開幕ベルは華やかに 有吉佐和子著 新潮社 1982
(913.6-A78)

カラフトアイヌ語 村崎恭子著 国書刊行会
1976～79 (819-Mu56-1～2)

子どもの人格の発達 川合 章著 大月書店 1982
(370.4-Ka93)

子どもと遊び 加古里子著 大月書店 1982
(376.17-Ka27)

講座言語 全6巻 大修館書店 1979～81
(808-Ko78-1～6)

向田邦子TV作品集 1 阿修羅のごとく 向田邦子
著 大和書房 1981 (912.7-Mu27-1)

(P 10に続く)

ぶらうじんぐる〜む

図書館と私



小林留美子（昭和57年度英文学科卒）

四年間、図書館を利用させて頂きました、正直なところ、折角のすばらしい本や豊富な資料を、十分に活用しきれなかったかもしれません。

予、復習をしながら、疑問がある時、すぐ手にとって調べられる豊富な書物がある、恵まれた空間である図書館は、私にとって、自分の勉強部屋以上に落ち着いて勉強や読書ができる、大学生活に欠かせない貴重な場所でした。

図書館の素晴しさは、利用すればするほど、わかってきたように思います。

始めは、クラブの関係で、新聞や「朝日ジャーナル」のような雑誌類を利用することが多かったのですが、そのような雑誌の目録カードがあることは、驚きでしたし、大変助かりました。

学年が進むにつれ、英米文学や語学関係の本や資料を読む機会が増え、洋書にもふれ、その数の多いことに新ためて感心し、文学作品や、

英語に対する興味が、一段と深まりました。

卒論作成の際には、研究書の少ない作家であったため、洋雑誌に掲載された論文記事を多く利用しましたが、探し方の要領がよくわからず、記事の収集に大分時間を浪費してしまい、もっと早目にガイダンスを受け、資料探しに習熟しておくべきだったと反省しました。しかし、他の大学の図書館を利用して調べたり、遠隔地の図書館からも資料を送って頂いたことから、図書館を通して自分の世界が広がる思いがすると同時に、図書館の持つ情報源の大きさに驚きました。

さらに、語学カセットテープを利用するようになり、図書館の新しい一面を知りました。テープは、カードのみで探すので若干時間を要するのが難点ですが、特に英文の学生には役立つ資料が多いと思います。

振り返ると、図書館のおかげで、私の学生時代は一層充実したものになったように思います。

後輩の皆さんも、思う存分図書館を活用し、教養を深め、知識を磨かれることを希望します。



(P9より続く)

- 日本語学(雑誌) 明治書院 1982.11～
日本文学研究資料叢書 夏目漱石 2、日本文学研究資料刊行会編 有精堂 1982 (910.8-N71-N:2)
日本の説話 全7巻 東京美術 1973～75 (913.08-N71-1～7)
おろおろ草紙 三浦哲郎著 講談社・1982 (913.6-Mi67)
歴史をつくる女たち 全8巻 集英社 1983 (367-R25)
李白の夢 武部利男著 筑摩書房 1982 (921-R32t)

- ルイズ 父に貰いし名は 松下竜一著 講談社 1982 (289.1-I91m)
シンデレラ・コンプレックス C.ダウリング著 三笠書房 1983 (367-D89)
詩的リズム 正・統 菅谷規矩雄著 大和書房 1978～81 (911.52-Su29-1～2)
書齋 A.ラング著 白水社 1982 (020.4-L24)
大雪山のヒグマ 小田島 謙著 山と溪谷社 1982 (489-O17)
積木くずし 穂積隆信著 桐原書店 1982 (369-H97)



読書のおもしろさ

高柳 早織 (保育科2年)

現在、マス・メディアには、書籍・雑誌・新聞・映画・ラジオ・テレビなど多くの種類があるが、中でも、ラジオ・テレビなどのように、何の苦労もかけず、優しく奉仕してくれる電波メディアが数多く発達してきている。そして、これからも、生活のあらゆる方面が日増しに便利になっていくだろう。しかし、そんな中で唯一、読書だけは変わらぬ努力を要求している。印象しか残らない電波メディアに対し、読書は多くの苦労を要求しながらも、それ以上のものを残してくれる。何度でも読み直すことができるし、私たちに考える自由を与えてくれる。決して強制はしない。テレビなら、だれが見ようと、同じ画面がでてくる。本はページをめくる者しだいで、印象も読み方もかわる。第一歩のところから異なるわけである。偶然出会った一冊の本が、自分の財産となる場合だってあるのだ。読書をしている時ほど、時間を有効に使える時はないといっても、過言ではないであろう。

さて、私と本との出会いは……。直接本に接する前に、父が職業上いつも本を読んでいた

こと。そして、たくさんの中ので育ったことが、抵抗なく本と親しんでいくようになった主な理由かもしれない。父は、あえて、特定の本を与えるのではなく、本屋に連れていって、自分自身の読みたい本を選ばせてくれた。幼児期は別として、小学校時代よく読んだのは、漫画入り歴史物語。それですっかり興味をもち、今だに歴史小説は、私の好きなジャンルのひとつに入っている。よく、読書はきらい、という人がいるが、それはおそらく始めから全然興味のないものを読まされたからではないだろうか。表紙がすてきだから。題がカッコいいから。そんな単純明瞭な理由でもいい。まず本をおもしろいと思うこと。自分の興味のある本なら、どんなにむずかしい専門書でも、辞書をひきながらでも、読みたいという欲求がわくはずだ。本は、知識の源泉です。みんなで、読書の輪、をつくしましょう!!



宇宙からの帰還 立花 隆著 中央公論社 1983

(538-Ta13)

海の都の物語 正・統 塩野七生著 中央公論社

1982 (237-Sh75-1~2)

笑うサム・心高原にある者 W. サロイアン著 英宝

社 1957 (A933.5-Sa69)

私の台所 沢村貞子著 暮しの手帖社 1982

(596-Sa95)

夜中の薔薇 向田邦子著 講談社 1982

(914.6-Mu27)

600 産業	0.4%
500 工学	3.6%
700 芸術	6%
400 自然科学	6%
800 語学	7%
200 歴史	8%
100 哲学	8%
000 総記	9%
300 社会科学	12%
900 文学	40%

雑誌の流れ

「図書館だより16号」では、図書の流れについて説明いたしましたが、今回は雑誌が閲覧室に並ぶまでの流れについてみてみましょう。ここでは、書店や、直接、学会・発行所から納本される購入雑誌と、各機関から郵送される寄贈雑誌（主に紀要類）とに分けて図で示してみました。



※……で囲んだ部分は、新規受入雑誌の場合のみの作業で、継続誌の場合は省略

雑誌は、このような過程を経て初めてみなさんの前にお目見えするわけです。多くの雑誌はある期間書庫に配架後、合冊製本され登録番号が与えられます。雑誌は補充がむずかしいので特に紛失などには気をつけたいものです。

編集後記

わが学園のシンボルとしても親しまれている藤の花が風に優しく揺れる頃となりました。せまいキャンパスは学生生活を満喫する乙女たちの若さではちきれんばかり……。

NEWS.....

寄贈図書紹介



昭和57年度文学部国文学科、英文学科、並びに短大英文科卒業生の皆さんから、下記の図書が寄贈されました。

- ・内田百閒全集 全10巻 (講談社)
- ・文学散歩シリーズ (文一総合出版)
- ・The Works of Herman Melville 全16巻 (名著普及会)
- ・ヴァージニア・ウルフ著作集 全8巻 (みすず書房)
- ・西脇順三郎全集 全12巻 (筑摩書房)
- ・シェイクスピアの生涯 (紀伊国屋書店)

館職員の異動

退職	総務部	品田 敦子	3月31日
	奉仕部	今村 朗子	4月10日
採用	総務部	笠原あけみ	4月1日
	奉仕部	小杉ゆう子	4月1日



❖ アンケート調査実施のお知らせ ❖

6月中旬に図書館利用アンケート調査を企画しております。皆様のご協力をお願いいたします。なお調査結果は次号に掲載する予定です。

今回の特集は前号にひきつづき「図書館をあなたのものに—卒業論文作成のために—」です。レポート、論文作成に頭を悩ませているあなた、ぜひお読み下さいね。

